

4年制看護大学3年次編入生が感じる問題

東岡 典子¹・吉田真由美¹・阪本 恵子²

要 旨 看護系大学の編入学は学部の途中から入学するため、既修得単位の換算方法などが個々の学生に応じて行われる。その実施内容は大学によって差があり、様々な方法がとられ、編入生のカリキュラム構成や事務手続きなども各大学で異なる。看護学科編入経験者である筆者の一人は、履修したい科目が履修できない等の問題を強く感じていた。そこで、本研究では、編入生が感じる問題をあきらかにすることによって、編入生の就学への支援を検討する基礎的データとして提供する。

了解が得られたB大学看護学科1～4期生の編入生を対象にインタビューを実施し、その内容を逐語化し分析した。その結果、6つのカテゴリー、すなわち、1)事務関係のサポート不足、2)編入生にかかる実習ユニフォームの経済的負担、3)カリキュラム編成への不満、4)講義内容、選択のしかたに関する困難さ、5)実習時期や指導に関する問題、6)編入生は大学に短大3年と大学2年の計5年間在籍：1年間のロスタイム、を抽出した。なお、それぞれのカテゴリーには複数のサブカテゴリー、計19項目で構成された。今回の研究で、編入生のガイダンスやオリエンテーションの重要性、学習意欲の低下の懸念、学習ニーズの多様化等があきらかになり、柔軟性のある編入学制度が必要であることが示唆された。

保健学研究 19(1): 37-42, 2006

Key Words : 看護大学, 看護学科, 編入学制度, 編入生からみた就学上の問題

(2006年5月31日受付)
(2006年8月18日受理)

緒 言

文部科学省によると、平成17年度4月時点で、看護系の4年制大学は127大学あり、そのうち95大学が編入学を実施している(2年次編入学実施の1校を含む)。看護系大学の編入学制度は、看護大学教育に携わることのできる学士資格者を育成することを目的に1976年より始まっており、看護短期大学卒業者に看護学士への道を開くとともに、広く生涯教育の機会を提供するという大学の役割の一つとして受け入れられている。また、生涯学習という観点から、1998年に学校教育法が一部改定され、専修学校専門課程(以下、専門学校)の修了者にも看護系大学の編入学受験資格が与えられたことによって、より多くの者が編入学制度を利用しやすくなった。しかし、編入生受け入れ人数は数名～10名程度が大半であるため、大学内においては少数派である。また、編入学を実施している大学では、編入生が過去に在籍していた短大、専門学校の既修得単位を大学の卒業要件と照合し単位認定している。したがって、不足単位を学生は、個々人に応じて取得することになる。この編入生カリキュラムの編成は、複雑であり、それぞれの大学において異なるため、各大学ともに、カリキュラム編成上検討を要している。事実、看護学科編入経験者である筆者の一人は、履修したい科目が履修できない等の問題を強く感じており、大学と学生双方に多くの課題を有している。

以上のことから、編入生が感じる編入学制度の諸問題をとりあげ、今後の編入学制度の検討上の一助として役立つよう、本研究に取り組んだ。

I. 目 的

B大学に編入学した学生を対象に、B大学看護学科編入生が感じる問題をあきらかにすることによって、編入生の就学への支援を検討する基礎的データとして提供する。

II. 研究対象および研究方法

研究対象者：B大学看護学科に編入学した編入生(編入学第1期生～第4期生)17名のうち、男女14名である。これは、B大学看護学科編入生全体17名の87.5%である。なお、編入学第1期生と2期生はすでにB大学を卒業し、第3期生4期生は現在B大学に在籍中である。

倫理的配慮：対象者14名全員に、本研究の参加・不参加は自由意志で、途中中断も可能であること、参加の拒否や途中中断による不利益はないこと、内容は研究以外では使用しないこと、個人名を特定できないよう匿名とすること、研究のどの過程においてもプライバシーの保護に努めることを説明し、同意を得た。

データ収集：まず、タイトルに関する各自の考えをopen-ended interview(自由回答式面接)で記入を求めた。次に、これを基にsemi-structured interview(半

1 県立広島大学保健福祉学部看護学科

2 長崎大学医学部保健学科看護学専攻

構成的面接)を実施した。なお、さらに、対象者と研究者の間で、メールと直接の対話をとおしてデータを追加・確認を行い、これら全てをデータ：逐語録とした。この間、随時、指導者からスーパービジョンを受けながら実施した。

分析：インタビューした内容を逐語化した。さらにそれらをコード化し、類似したコードのクラスタリングとラベル付けを行い、カテゴリー化した。随時、指導者からスーパービジョンを受けながら実施した。

Ⅲ. 結 果

1. 研究対象者の背景

対象者：14名中、女性は12名、男性2名、年齢は23—30歳（平均25.6±3.5）で、編入前に臨床経験のあるものは3名（3名ともに臨床経験7年）である。

のは3名（3名ともに臨床経験7年）である。

2. 逐語録からあきらかにされたカテゴリーとサブカテゴリー

カテゴリーは6つ、サブカテゴリーは19つ抽出された。例えば「事務関係のサポート不足」というカテゴリーの中には、「編入学生の専門事務担当者がいない」「事務手続きの不備」「授業開始時に教科書が手元に届かない」「編入生が受けるガイダンス、オリエンテーションへの不満」という4つのサブカテゴリーが列挙された。また、「事務手続きの不備」のサブカテゴリーの具体例としては、(実習ユニフォームなどの必要経費の情報不足)(健康診断結果が遅い)(履修登録の手続きの多さ)など9つの具体例が示された(表1)。

表1. B大学編入生が感じている問題

カテゴリー	ラベル付け (サブカテゴリー)
1. 事務関係のサポート不足	* 編入学生の専門事務担当者がいない
	* 事務手続きの不備 <ul style="list-style-type: none"> ・ 白衣などの必要経費の情報不足 ・ 健康診断結果が遅い ・ 履修登録の手続きの多さ ・ 講義連絡の不備 ・ 単位認定の連絡が遅い ・ 編入生のみに必要な情報連絡の遅さ ・ 講義変更などの情報伝達機会の少なさ ・ 出席簿に名前が無い ・ 対応が二次
	* 編入生が受けるガイダンス、オリエンテーションへの不満 * 授業開始時に教科書が手元に届かない
2. 編入生にかかる実習服の経済的負担	* 新しい実習服の購入の問題 * 以前のユニフォームが利用できない
3. カリキュラム編成への不満	* カリキュラム編成が複雑である * カリキュラムに余裕がない * 編入生の独自のカリキュラムがない
	* 期待していた地域看護学系の授業と看護学系の授業が充実していないこと
	* 助産師資格習得が不可能 * 既修得単位の認定が時間数不足等によってされにくい
4. 講義内容、選択のしかたに関する困難さ	* 大学1・2年生と合同の講義に対する充実感の不足 * 本大学開講の基礎演習(1学年開講)を受講する必要性を感じない
	* 講義選択が自由に出来ない <ul style="list-style-type: none"> ・ 科目の重複がある ・ 他学科、他学年の講義の選択範囲が狭い ・ 似たような講義内容のどちらかを選ぶことができない ・ 学びたい科目が選択できない
5. 実習時期や指導に関する問題	* 編入生が行く実習の事前説明、指導の不足
	* 夏季休業中に実習がある
	* 実習期間や実習グループが特定であるために起こる問題 <ul style="list-style-type: none"> ・ 就職活動ができない ・ 卒業研究が大変 ・ 編入生のみグループとしか実習にいけない
6. 短大等3年と大学2年の計5年間に在籍：1年間のロスタイム	* 一年間で必須単位は習得可能であるのに二年大学に在籍する

IV. 考 察

表1の結果に示した6つのカテゴリーに沿って考察する。

1. 事務関係のサポート不足

事務関係の手続きにおいて、編入生は学部生と異なる事務手続きが必要となることがある。したがって、編入生担当の事務職員がいることが望ましい。B大学においては、編入生の担当者がいるが、常に編入生の対応をしているわけではないので、対応が遅れることもある。また、全ての事務職員が編入生の事務手続きに詳しいわけではなく、学部生とは異なる授業を履修している編入生にはそれだけ手間が増え、連絡事項等が遅れてしまう。また、編入生も出身校と事務手続きが異なるため、講義の履修を行う時等に混乱が生じる。入学時のガイダンスやオリエンテーションも、3年次編入生は1年生と一緒に受ける。このため、履修などに関する事務手続きに関わる混乱を事前に知ることができず、問題が生じてから初めて気がつくことがある。ゆえに、これらの問題の解決には、地域看護学の教員を必ず含め編入生だけ別のガイダンスやオリエンテーションを組む等の工夫がほしい。

教科書について、編入生は全てではないが学部生と同じものをそろえる必要がある。しかし、B大学においては、授業開始にテキストが届いていない（入学前に使用テキストを書店に手配することが遅れた事があった）という現実があり、学業に支障をきたす問題があげられている。学生も大学の構成員のひとりとして教育を受ける権利を有しているが、このような事務上の不備は、その障害になると考える。特に、B大学1年生も教科書が授業の開始に間に合わないという同じ状況であったため、事務上の手続き不備は大きく、学生の学習ニーズを満たした教育という視点で検討していく必要がある。

2. 編入生にかかる実習ユニフォームの経済的負担

編入生は、出身校や職場で使用していた実習服を持っている。しかし、B大学においては、大学の規則のため実習服は必ず必要であると決められている。この実習ユニフォームを使うのは、『総合実習2週間2単位（1単位は地域看護学実習分）』の看護学の実習時だけである。編入の3期生からは、実習場所によっては実習ユニフォームを用いないこともある。また、実習服は大学在学中のみの使用であるので卒業後は無駄である。したがって、現在、B大学では、1期生の先輩の実習服を後輩が受け継ぐという工夫がなされている。大学によっては、編入生の使用する実習ユニフォームは出身短大や専修学校のものを使用し、学部生と同じでなくてよい大学もある。このような点を考慮すれば、実習ユニフォームを新たに購入する必要はない。

3. カリキュラム編成への不満

編入生のカリキュラムの編成は、既修得単位の認定が大きく影響する。窪田¹⁾、大室²⁾によると「単位の認定方式には「一括認定方式」と「個別認定方式」があり、大学によって異なる。B大学においては、「個別認定方式」を採用しており、各編入生の出身校の科目をB大学の類似した科目ごとに照合している。「一括認定方式」のように大学側が定めた単位数をすでに習得したのものとして認定する方法ではないので、一般教養の少ない専門学校卒業の編入生や履修してきた科目の少ない編入生は、一般教養科目の履修等が必然的に多くなり、自分で選択できる範囲が狭まる。また、B大学は看護以外の学科が複数あるため、履修する際に、他学科の講義がとりにくい現状がある。特に、看護学特論は集中講義であることが多く履修がしにくい。多くの編入生が編入学の志望理由に、看護学をもっと学びたいという意欲を持っていることを考えると、理想と現実のギャップが伺える。

ところで、編入学の単位認定の仕方は、学校教育法第52条に定められており、単位互換制度を利用した科目や文部科学大臣別に定める学修という要件に当てはまらないものである。仕方のない部分が多い。しかし、看護師として看護研究を実際に行ってきた編入生が、内容は同じであるにもかかわらず出身短大などと科目名が異なることや、編入大学では45時間1単位の科目が出身短大などでは30時間取得であったため時間数の不足を理由に単位認定されず、1・2年生と合同で履修しなければならない（例：看護研究の基礎45時間1単位）。これらのことは、他の科目の履修を希望する学生にとっては、日時が重なる場合、卒業要件科目を優先せざるをえないため、やむをえない現実問題であり、今後検討が必要である。

4. 講義内容、選択に関する困難性

考察3で述べたとおり、各編入生のカリキュラムはバラツキがあり選択が限られる場合が多い。時間割の都合によって、必修科目や希望する選択科目が重複することが起こる。また、B大学では、複数学科が存在しており、短期集中講義や変則的な時間割があるので、科目の履修が行いにくい。授業が重なり、希望する科目が履修できないことは、編入生が感じる問題点として稲川³⁾、水野⁴⁾の報告でもあきらかにされている点であり、B大学編入生に限られたことではない。

窪田¹⁾、小野⁵⁾は、「総じて編入生は勉学への意欲が高く、卒業後の進路に対する目標も明確に持っている」と述べている。したがって、編入生は1、2年生と合同の授業に温度差を感じ、充実感が得られず、必要性に疑問を感じる講義もあったと考えられる。

5. 実習時期や指導に関する問題

B大学の編入生が行う実習は、考察2で述べたように

『総合実習2週間2単位(1単位は地域看護学実習分)』とは別仕立てで地域看護学実習の3単位があり、それは4年次の夏季休業中に行うことを基本としている。しかも地域看護学の実習は編入生だけで行われている。この実習は時期的に就職の新卒看護師と新卒保健師の募集期間であり、病院見学や採用試験日と重なることが多い。特に、新卒看護師の就職活動は大学の夏季休業である8月が活発になる時期であり、多くの医療機関等で説明会などが催されている。この時期に実習を行えば、就職活動に時間的、体力的圧迫を与えることは明白である。また、心理的にも実習と就職活動の重複によって、あせりや不安というストレスを与えやすい。これは、卒業研究の進行にも影響する。なぜなら、長期的で継続的な卒業研究では、夏季休業というまとまった休みの期間は、卒業研究を進めることができる重要時期であるからである。しかし、実習によってこの卒業研究も圧迫される。

指導に関しても、学部生と同じ看護記録の書き方、実習の仕方をしてきていない編入生は、その実習の前後にフォローが必要である。また、学生によっては編入学後にまったく臨床実習に触れていない場合もあり、ブランクに戸惑う学生や逆に病院勤務が長く実習自体に戸惑う学生もいる。記録用紙の書き方の見本や学部生と混ざって実習ができるようにするなど学部生と同じ条件に近くなるような配慮が望まれる。

学部生と実習を共にしない場合は、編入生という小集団だけで固まってしまう傾向もある。サブカテゴリーでも、編入生だけの顔見知り同士のグループ実習に不満を示している。このように、実習の時期、グループメンバー、実習指導など、多くの問題が実習によって発生しており、これらのことも検討を要する点である。

6. 短大等3年と大学2年の計5年間在籍(1年間のロスタイム)

現在、看護系の4年制大学での編入学は、3年次編入と2年次編入の2通りであり、3年次編入学が主流である。したがって、3年次編入学を行うということは、短大あるいは専修学校3年間と大学2年間、通算5年間在籍して大学卒業ということになる。一方、大学を卒業していなくても22歳で大学院への進学は可能であり⁶⁾働きながら学べることも大学院設置基準⁷⁾に定められている。実際に大学を卒業していないが、仕事と大学院を両立している報告もある⁸⁾。そうなってくると、3年間学び看護師免許既修得者にとっては、保健師・助産師取得資格を希望する学生は別として、看護学の学びを深める場所は、大学編入学だけではない。看護系大学で編入学制度を実施している大学は95大学(2005年12月現在)であり編入学を希望する学生は増えている。その中には臨床経験者も増えている。編入学生の背景が多岐にわたれば、学習ニーズも多様になる。これらに答える一つの方法として、また、柔軟性のある編入学制度として、二年間の

在学期間は是非かが、今後の検討課題になろう。

以上6つのカテゴリーを総合して検討すると、編入学という学部の途中から入学する編入生は、単位の認定や事務手続きに個別の対応が必要であり、そのため、事務にも混乱が生じていることが分かった。この事務上の問題が、カリキュラムや講義、実習内容に関しての不満に影響していた。これらは主観的な問題であるにも関わらず、多数の編入生が不満を持っていた。大学での学習体験が自分の期待していた内容でないためニードが満たされないとする過去の研究結果と類似する結果である。

河野⁹⁾ら、平河¹⁰⁾は、「編入生の学習ニードや背景は多様であり看護学や一般教養である社会科学系学問を深く学びたいという意識が強い」と報告している。また、近田¹¹⁾は、「短期大学や専門学校を卒業している編入生は、学習目標が明確で学部生より意識が高い」と報告している。ゆえに、カリキュラム編成への不満や講義の問題は学習意欲の低下につながる。

時間的、経済的な負担という意味合いが強いのは、実習ユニフォームの経済的負担、実習時期、大学に2年間在学することである。短い実習期間のために、出身校の実習ユニフォーム以外に更に大学の実習ユニフォームを購入ということに疑問がある。また、B大学の実習時期は夏季休業中であり、就職試験や卒業研究に時間的、体力的負荷を与えやすい。一方、果たして2年間在学することの是非を問題提起している学生もいる。

編入生のカリキュラム、講義選択、学習意欲について言及している先行研究は多くあり、課題も多い。さまざまな学習ニードや背景を持つ編入生が十分納得できるカリキュラム編成というものは難しいが、編入学を実施する大学の増加や大学院の入学資格の広がりといった現在の状況を考えれば、より柔軟性のあるカリキュラム、サポート体制が望まれる。

V. 結 論

B大学看護学科1～4期生の編入生を対象にインタビューを実施し、その内容を逐語化し分析した。その結果、6つのカテゴリー、すなわち、1)事務関係のサポート不足、2)編入生にかかる実習服の経済的負担、3)カリキュラム編成への不満、4)講義内容、選択のしかたに関する困難さ、5)実習時期や指導に関する問題、6)編入生は大学に短大3年と大学2年の計5年間在籍：1年間のロスタイム、を抽出した。なお、それぞれのカテゴリーには複数のサブカテゴリー、計19項目で構成された。

今回の研究で、編入生のガイダンスやオリエンテーションの重要性、学習意欲の低下の懸念、学習ニードの多様化等があきらかになり、柔軟性のある編入学制度が必要であることが示唆された。

本研究の限界

本研究では、B大学看護学科編入生を対象としたもの

であり1大学編入生のみ限定された内容である。それらの何点かは、他大学と比較し共通課題であるかもしれないがB大学だけの課題もある。したがって、今後は、複数の大学に協力を求め、検討することが望ましい。

謝 辞

本研究にご協力いただいたB看護大学の編入学卒業生と在学生、事務局の方々、また、他大学の看護系大学事務部の方々にお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 窪田恵子他：編入学受け入れの実際；西南女学院大学保健福祉学部看護学科，看護展望，25：478-481，2000.
- 2) 大室律子：看護系大学の編入学制度，看護教育，42：894-897，2001.
- 3) 稲川ひとみ：看護大学編入学の問題点とその解決に向けて，看護教育，44：136-138，2003.
- 4) 水野照美他：看護大学における編入学教育の評価，日本看護学教育学会誌，1：20-30，2000.
- 5) 小野美穂：編入学生による講義が一般学生に与える影，看護教育，4：739-745，2003.
- 6) 学校教育法施行規則（昭和22年文部省令第11号）の一部を改正する省令新旧対照条文.
- 7) 学校教育，第2節，設置基準等（大学印設置基準）：平成元年文例34・一部改正；教育方法の特例.
- 8) 阪本恵子：働きながら学ぶ学生の仕事と学業の両立の要因；看護系大学院修士課程に学ぶ学生の分析をととして，人間と科学，6：91-104，2006.
- 9) 河野祐子他：看護大学編入学生の学習ニーズに関する実態調査，聖路加看護大学紀要，20：40-48，1994.
- 10) 平河勝美：看護系大学編入学過程の現状に関する調査，看護教育，35：225-232，1994.
- 11) 近田敬子他：“編入学制度”の実際と課題，看護展望，25：470-485，2000.

Obstacles to Study of Third-Year-Entry Students at a Four-Year Nursing University

Noriko HIGASHIOKA¹, RN., Mayumi YOSHIDA¹, RN., Keiko SAKAMOTO², RN., Ph.D.

1 Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

2 Department of Nursing, School of Health Sciences, Nagasaki University

Received 31 May 2006

Accepted 18 August 2006

Abstract Entry into nursing-related universities at year-levels other than first-year may be granted to continuing students who have taken nursing courses at other institutions, depending on recognition of already completed course credits. The methods and administrative procedures of such entry, and the nature of the curriculum for continuing students, vary from university to university. One of the authors of this article was a third-year entrant to the Department of Nursing at University B, and had a strong sense of some of the obstacles involved in such study.

Consequently, the purpose of this paper is to highlight and discuss the obstacles to study experienced by continuing students. The subjects of the study were 3rd-year entrants to the Department of Nursing at University B. An interview with the students was carried out, transcribed and analyzed. From the analysis we abstracted six categories of obstacles : 1) insufficient administrative support; 2) financial burden on the students of procuring uniforms for practicums; 3) dissatisfaction with the nature of the curriculum; 4) obstacles with the content of classes and the method of choosing classes; 5) obstacles with the timing and supervision of practicums; 6) Time loss :by the excessive amount of time spent as an undergraduate. These major categories comprised nineteen separate subcategories.

This research highlights the importance of guidance and orientation for continuing students, the risks to study motivation, and the diversity of study needs. It also indicates the need for a more flexible system of entry to nursing universities at levels other than first-year.

Health Science Research 19(1): 37-42, 2006

Key Words : Nursing University, Department of Nursing, Continuing Student System,
Perceived by Obstacles to Study